

---

## Muv-Luv TE-if-（リメイク中）

アンノーン万歳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M u v - L u v T E - i f - (リメイク中)

### 【Nコード】

N 4 1 0 6 Z

### 【作者名】

アンノーン万歳

### 【あらすじ】

1月10日、リメイク開始

2001年、BETAの地球への侵攻が開始されてからおよそ28年

世界の残り人口はおよそ十億人。かつて人類が支配していた星、地球。

その土地の大半はいまやBETAの物となっており、人類は未だそれら地域の殆どを奪回する事が出来ていない。

あまりにも絶望的な戦況の中、誠しやかに囁かれる噂が有った。世界各国の企業　かつてカナダに存在したレイレナードを主体とし、アメリカのグローバルアーマメンツ、イギリスのローゼンタール。

日本の有澤重工、西アジアからオームル・サイエンス・テクノロジー、中東からはアルゼブラ。ヨーロッパからはインテリオル・ユニオン。　北欧からはアクアビット。様々な兵器の分野で素晴らしい業績を残してきたこれら企業が、一つに合併。

その名はアスピナ機関　既存の兵器とは全く違った概念と戦略を持つ新たな兵器の開発に着手している。

既に幾つかの兵器は実践に投入されており、そのどれもが目覚ましい戦果を挙げている。　そしてこれらは人類の希望なのだ　と

## ブローグ

2001年 4月 30日

アメリカ合衆国 ネバダ州南部 グレーム・レイク空軍基地 通称  
エリア51

アスピナ機関、米軍共同研究区域特殊実験施設

太陽の光も入らない、光源も何も無い狭い密室の中。  
衛士用の強化装備を着ている意外はなんの変哲も無い少年。 年は  
十代半ば、それより少し若いといったところか。

「AMS、接続開始します」

「接続レベル、0.01から開始。 時間の経過と共にレベルを  
上げていきます」

彼が普通の人間と決定的に違う所があればただ一つ、義体の様に  
増設された首の後ろ。 頸椎に当たる部分の接続用ジャック  
そこには既にプラグが差し込まれ、それが続く先は椅子 正確に  
言えば“コックピットのシート”

何も知らぬ他人がこれを見れば、狂気の人体実験としか思えないだ  
ろうし、事実彼らがやっている事はある種狂気じみている

「エクスペリメント05とラインアークの完全接続を確認。 成功  
です」

「ふむ……では、AMSの接続レベルを0.5までゆつくりと上げ  
て行け」

“人体と機械の融合” 脊髓や延髄を経て脳と戦術器の制御装置を直結させてデータのやりとり。

Allegory Manipulate System

戦術器の近接戦闘における反応速度の超上昇、思考によってコントロールされる精密射撃、視覚情報の共有による敵の早期発見。主にこの三つを目的として開発された戦術器の新たな操縦方法。

脳と制御装置における電気信号を完全に理解、やりとりする必要性が有るために操縦出来る人間は極僅かだが、AMSを搭載した戦術器は並みの戦術器とは比べ物にならない性能を誇る。

「AMSの接続レベル2、5に到達……凄い、理想値の二倍を超えている。エクスペリメント05もまだまだ余裕みたいですね」

「これなら自分の体のように……いや、自分の体を動かすよりも容易く戦術機を操れるだろう

ふんっ……何が役に立たない机上の空論だ！ いざこうして完成させてみれば、今までの戦術機など塵芥も同然ではないか！！

戦場は変わる、時代遅れのノーマルTSFは排斥されて私の発明こそがBETA共を蹴散らしてくれる！」

故に、こう呼ばれるのだ。

「私のネクストがなア！！」

次なる者

2001年現在 世界人口約10億人 日本人口約7400万人  
人類は以前滅亡の淵に有り されど、一筋の光が現れる

アスピナ機関に属する少年の名をエクスペリメント05。 20

人のAMS適正所持者の中でもずば抜けた適正を持つ一人の少年  
そして彼専用<sup>戦術機</sup>に開発されたネクストTSFLINE ARC、コー  
ドネーム『ホワイトグリント』  
単純戦力にして戦術機数十機分とも呼ばれる程の彼等の登場が、果  
たしてこの世界に何を齎すのか

## ブローグ（後書き）

基本的な知識について

### ・AMS

パイロットと機体をコネクタによって接続、機体情報を電気信号としてパイロットが脳を使って直接やり取りする操縦方法  
通常の戦術機は

思考 入力（操縦） 出力（戦術機の行動）だが、AMSを搭載していると思 考 出力

レバーやスイッチなどの操縦という過程をすつ飛ばしていきなり戦術機がパイロットの望んだ通りの動きを行うために反応速度が非常に高まり、指先といった細かな拳動も御しやすくなる

一方で機体情報を総て電気信号として受け止めるために、AMSを扱うには特殊な才能が必要となる

### ・AMS適正

文字通り、AMSをどこまで上手く扱えるかのような基準値。

適正が低ければ機体の操縦はそれだけ大雑把になり、適正が高ければより細かな拳動が可能。

指先といった細かい部品を排除し、情報量を減らすなどすればAMS適正が低くてネクストを操る事が出来る（他には腕を丸ごと武器にする、等）

### ・接続レベル

オリジナル設定、パイロットと機体をどれだけシンクロさせるか。

この数値が高ければ高いほど細かな操縦を行う事が出来る、という

点ではAMS適正と殆ど同じ。

しかし、接続レベルをパイロットの適正に見合わせぬ程に上げてしまうとパイロットの精神に大きな障害を与える諸刃の剣。

これの調整は非常に難しく、今までに四人の人間がAMS接続レベルの上げすぎによって“壊れて”いる。

AMSとはパイロットと戦術機を接続する、言ってしまうえば自分＝戦術機となるのだ。

あまりにその結合が強くなれば“自分”を見失ってしまい、その例えようのない感覚に耐え切れずに壊れてしまう。

・LINE ARC ホワイトグリント

主人公の乗る機体、詳しくは「ホワイトグリント」で検索。

武装はライフル二挺と分裂型ミサイル、状況に応じて変更可能。

アサルトアーマーとかプライマルアーマーは流石に使えない、それでもAMSを搭載しているために並みの戦術機とは比べ物にならない戦力となる。



## ブローグ2

空は灰色の雲に覆われ、大地は永遠に終わらないかのように、  
うに地平線へ続く砂で覆われている。

その上空200m程を高速で飛翔する白の閃光

「エクスペリメント05のAMS接続レベル5、0にて安定　　ラ  
インアークの戦闘エリアまで後十秒」

戦闘機とはかけ離れたその姿を一言で例えればX字だ  
両腕は肩と共に正面へ突き出され、その手に持ったライフルは機体  
の前へ向けられている。

背中に翼のように取り付けられた十四個のブースターは七個ずつ一  
直線に広げられており、更にそのすぐ下には十二個のブースター  
が六個ずつ、丁度X字になるようにして青い炎を吹いている。

頭部は突き出した胴体に埋もれるように埋没しており、とても人型  
とは思えない。

一直線にならぶブースターの両端に付けられた三角の箱は分裂型  
ミサイルS A L I N E 0 5。

両腕にはそれぞれ051ANNR、063ANARと呼ばれるライ  
フルを装備したその戦術機の名　未だどの国のデータベースにも  
登録されておらず、この世で唯一AMSを搭載した実践的な戦術機。

『こちらエクスペリメント05ホワイトグリント、作戦を開始しま  
す』

ホワイトグリント

LINE ARK 白い閃光、ネクストTSFと呼ばれる通称  
“最強の戦術機”

それが行なっている今回の作戦は単純明快、進行してきたBETA  
の集団を一機で全滅させる事。

本来ならば何機もの戦術機と補給用コンテナを用いて行われるよう  
な任務に対して、投入している戦力は一騎 正気の沙汰では無い。

BETAの中でも光線級と呼ばれる遠距離砲撃に特化した個体は  
既に“彼”とホワイトグリントを認識し、その眼球の様に見える部  
分に少しずつ緑色の光が集まっていき 放たれた。  
その一筋に伸びていく緑の光線は確かにホワイトグリントに向かっ  
て飛翔し

瞬間 爆音と共にホワイトグリントは姿を消した

「クイックブースト……瞬間最高時速は2500kmと言った所か、  
VOB無しでこの速度……ふふ、凄まじいな」  
「それはオーバードブーストとクイックブーストの同時起動ですか  
ら……ですが、チューニング次第ではこれ以上の数値も可能ですよ」

次の瞬間、先程までホワイトグリントが飛翔していた場所より遙  
か斜め前に現れる純白の塊。

あれ程の速度で巡航を行なっているながら急激な加速で無理矢理進路  
を変更し弾を回避する、戦闘機でも戦術機でも不可能なそれを成し  
遂げる。

それを成功させたホワイトグリントが使った機能は単純、オーバ  
ードブーストと呼ばれる超高速機動中に使用したクイックブースト  
と呼ばれる瞬間的な急加速だ。

通常、戦術機において一瞬でこれほどの加速を行えば機体のバランスが制御出来なくなったり、搭乗者がGに耐えられなくなったりで使い物にはならない。

しかしネクストは違う　AMSと呼ばれる特殊な制御方式を採用し、さらにこれまでの研究データを元に開発された特殊強化装備を着込む“彼”ならば。

進路を無理矢理無視して瞬間時速2500kmで急激な挙動を可能とするこれは最早“テレポート”と呼んでも相応しい。

ミサイルなど目前僅か数mに迫ったところから回避できるし、遠距離から放たれるレーザー等“予め発射される事を分かっていたら”何という事は無い。

その異常な瞬間速度も少しずつ下がっていくとそのままホワイトグリントの両肩のミサイルハッチが開き、火薬が炸裂するような音と共に二つのミサイルが放たれる。

『ホワイトグリント、ミサイルの着弾を確認後オーバーードブーストを解除して通常戦闘に移ります。』

戦闘データ、ちゃんと取ってくださいよ』

「ふふっ……ああ、任せておきたまえよ。私の愛するホワイトグリントが戦うのだ……一瞬だって目は離さないさ!!」

そのまま次々と放たれる三発、四発目のミサイル　強引な光線の回避と共に響いた火薬の炸裂音の回数が一つにつき丁度24を超えた辺りで、背部ミサイルユニットはユニット接合部に予め装填された炸薬によってパージされる。

ホワイトグリントの後方へと落ちていくSALINE05、一方ソレが最初に放ったミサイルは変貌を始めていた。

「ミサイル第一射、着弾まで10……9……」

一番最初に放たれた中型のミサイルが、空中で“分解”した  
いや、正確にはそう見えただけ。

ミサイルを覆う白の装甲が剥離して中から現れる八発の小型ミサイル……S A L I N E 0 5の所持する分裂ミサイルはその名の通り八つの小型ミサイルに分裂してそれぞれが違う目標に接近する

それが24×2×8、合計で384発放たれたのだ　いくら小型  
とはいえその威力は対人兵器の比ではない。

小型の戦車級や防御力の余り無い光線級はおるか、要撃級、さらに  
突撃級にすら致命的なダメージを与える事が出来る。

広大な砂漠には無尽蔵の砂煙が散蒔かれ、B E T Aだった残骸が  
バラバラに落ちてくる地獄の様な様相を見せる場所にホワイトグ  
リントが着地する。

着地する前に行われた変形により頭部はちゃんと上部へせり出して  
いるし、X字のブースターも折り畳まれてより戦術機らしい外見に  
は近付いているが……その戦闘力はやはり戦術機を凌駕していた。

クイックブーストによる回避、射撃、射撃、回避、射撃、回避、

回避、射撃射撃射撃……

無限とも呼べるほどの機動力を持つホワイトグリントに鈍重なB E  
T Aが近接戦闘に持ち込める筈もなく、突撃級の攻撃も簡単に回避  
され　拳句には跳び箱の様に突進する突撃級の外角を踏み台にし  
て跳躍　そのまま装甲の薄い後方部へ射撃。

戦術機はおるか人間ですら可能か不可能か分からない機動で回避と  
攻撃を一つの動作の中に纏めたのだ、その様な行動を容易く行うホ  
ワイトグリント一機に対してB E T A群は蹂躪され続け……

そうして作戦開始から十数分が経過した後。

BETAの全滅を確認した統合仮想情報演習システムは終了、複数による訓練を想定した対BETA防衛戦維持訓練。

それもBETAの数を通常の何倍にも増やした訓練すらAMSを搭載した戦術機　ホワイトグリントー機にすら及ばないという事実が全世界に証明される事になった。

この情報を受け、世界　特に戦術器の能力不足に悩む帝国は“ネクスト”の研究を、可能ならば実戦配備を行うべきとの結論に到達。

XFJ計画の要項に加えられた一つの文章　それは至極単純な物

・アスピナ機関、及びアメリカの協力により不知火に試験的なAMSを搭載、戦力やパイロットへの副作用を初めとしたデータの収集

2001年　5月　3日

アメリカ合衆国　ネバダ州南部　グレーム・レイク空軍基地　通称  
エリア51

地下四階　アスピナエリア

「先のデータを受けて、帝国からもアスピナ機関への協力の申し出

が有ったよ。

ふふ　純国産の不知火をアスピナ機関で改造して良いらしい……  
とはいっても、AMSを乗っけるだけだね。　その代わり戦闘  
データはこちらも貰って良いらしい。

……君にこういう話は分らないかな？」

『……申し訳ありません』

一つの長机を挟んで椅子に座る金髪の男と、それに向かい合う形で立つ少年。

前者の姿はホワイトグリンのシミュレーターをずっと見ていた初老の男、後者はそのホワイトグリンを操っていた少年　エクス  
ペリメント05。

男はぴっちりとしたスーツを着こなしている一方、少年の方は衛士用の強化装備の上から長袖のジャケットを適当に來ているだけなのも印象的だ。

何よりも印象的なのは、彼の服装が

強化装備には記されているのはOとTを組み合わせたかのようなアスピナ機関のマークであり、国家や軍属である事を示すマークは付いていない。

ジャケットは恐らく市販の物　ここまで来れば、彼の立ち居地が分かるだろう。

彼は軍人ではないし、何処かの国家にも属していない。　ただのアスピナ機関という研究機関に自分のAMS適正と体売り出した被検体であり傭兵の様な存在。

アスピナに正式に所属しているも階級等はそもそも無いし、軍隊の様に細かい規律も無いために服装も自由　ちゃんと上の指示さえ聞いていれば基本的に自由なのだ。

男の名前はリー・バトラー。ホワイトグリンツの設計から開発、さらにその運用の全てを一任された研究者であり機関の幹部。ホワイトグリンツに関連する事象は全て彼の命令で行われ、当然ホワイトグリンツのパイロットも彼の指揮下に置かれる。

「気に止む事は無いよランク1、元より我々が君に期待しているのはその高い適正と能力だ。」

考える事は我々の仕事だ……さて、そんな君に新しい仕事だよ」

『…………』

口を開く前から、少年は大体察しが付いていた。

先程の帝国軍の前置き、不知火の改造の話、そしてその後いきなり自分に渡される任務

「君にはアラスカに行き、そこで試験型不知火のテストパイロットを勤めてもらう……アメリカ、帝国、そして我々の協力任務だ。適正を持っていて尚且つテストパイロットが勤まるような実力を持つのは君だけだからね」

## ブローグ2（後書き）

Q・ホワイトグリント強くな？

A・プライマルアーマーとアサルトアーマーを持ってないからこれでも弱体化した方



## 追記1 通常戦術機操縦法とAMSの差について

強化衛士装備に関係する資料探しをしていたら、自分の無知によって作中に矛盾が発生してしまいそうになったので此処に記述します。

作中では、AMSとは「思考と同時に機体を制御する事が出来、才能さえ有ればほぼ直感だけで操縦できる」というように記述していました。

通常戦術機も間接思考制御で操縦しているという事を私は知らずに書いていました……

そのために、こちらにAMSと間接思考制御の違いを記述しておきます。

まず、通常戦術機の間接思考制御。

これはヘッドセットとスーツで脳波等を測定 装着者の意思を統計的に数値化しデータを更新 戦術機や強化外骨格の予備動作に反映させる。

一方のAMS、これはヘッドセットとか関係なしに操縦者と機体が直結してます・

つまり、己がどのように機体を動かすかを“直感的”に電気信号に置き換えてそれを機体の統合制御体へ送信。

この二つがどのように違うかというと、情報の精度と反応速度です  
戦術機ならば『思考 数値化 データ更新 動作』となりますが、AMSは『思考（と同時に電気信号に置き換える） 攻撃』、つまり思考と同時に攻撃を行っております。

またAMSは『統計的に数値化したデータ』ではなく、文字通り機体Ⅱ自分の体となります。

それは当然、指先といった非常に細かい部分まで機敏な動作を可能としており、通常の戦術機とは一線を画す精密作業を行う事も可能。

ひとまず、操縦系統の差に関してはこのような設定です。

これから先も設定に矛盾やおかしな部分が有ればこうして追記していきますので、是非呼んで頂ければ幸いです

## 設定

情報量不足の為に、完全な情報開示は不可能

現状“彼”について知りうる全ての情報を表示

呼称：エクスペリメント05、ランク1

年齢：10代半ば、それより少し若い程度と思われる

容姿：色素の抜けたような薄い金髪、黒目、身長は150cm程度と思われる。

首の後ろ、頸椎の部分にはAMS接続用のジャックが付属しており、それを隠すように後ろ髪を伸ばしてさらにマフラーを常に付けている。 熱帯では包帯を使用。

アスピナ機関のマーク（小さな○に大きなTが描かれたような物）が描かれた強化装備の上からジャケットを羽織るのが普段着

性格：任務に忠実、作戦行動中は若干興奮状態に入る模様？ 情報量不足

備考：黒目と金髪からアジア人、西洋人のハーフと思われる。

戦場に立つのはおかしいような年齢であるが、ネクストに乗った際のその戦闘能力は並みの衛士では十数人居ようと抑える事は出来ない。

当然 ということもおかしいが通常の戦術機に乗っても非常に高い戦果を叩き出す、まさに“戦争の為に生まれた様な子供”

非常に高いAMS適正を持ち、脊髄や脳に与えられた電気信号を“一瞬で完全に”情報として認識可能。当然脳内の情報を自らの意思で電気信号に変換する事も可能。

過去の記憶を脳内で“電気信号”に変換し、それを機械媒体を用いて“映像”として他人に見せる事が出来る。

これは天性の才能で有るため、本人には非常に高い学力といった物は確認されていない。

本名は不明。アスピナ機関の実験体に名前がある確信すら無いが。

戦闘中は自信に満ち溢れた言動を放つが、それ以外では大人しめ。

興奮状態になると気性が荒くなると推測される。

上官の命令には非常に従順。

エクスペリメント05の駆る戦術機はLINE ARK、通称『ホワイト・グリント』アスピナ機関にて、彼の為だけに作られたワソフ機。

量産も可能なのだが、操縦には非常に高いAMS適正が必要なために量産したとしても乗りこなせる者は三人居れば良い方だろう。

尚、彼はこれ以外に「TYPE-LAHIRE」「X-SOBRE RO」と呼ばれる高速機動戦用の機体を操る事が出来る。

彼が搭乗する機体は総て白くカラーリングされており、数少ない彼の実戦を見た衛士の間では「白のイレギュラー」「アスピナの白い閃光グリント」と呼ばれ、その噂は『BETAに対する人類の切り札』として常に広まり続けている。

搭乗ネクスト：LINE ARK

> i 3 7 4 3 6 — 4 6 8 5 <

> i 3 7 4 4 0 — 4 6 8 5 <

そのカラーリングから、ホワイトグリントという名で呼ばれる事が多い現状最強のネクスト。

変形機構、非常に高いオーバード、クイックブースト能力を持ち、当然AMSを搭載しており、カメラアイ保護シャッター機能など新技術も搭載。

エクスペリメント05の為だけに作られた完全ワンオフ機でありながら、今まで作られたネクストと共通の規格を使用しているために過去に作られた武装も使用可能。

基本はライフル二挺、ミサイル二つ、レーザーブレードを標準装備として所持しているが、戦況によっては武装の変更も行う。

例えば、中距離支援装備としてガトリングを四門装備する事も可能。

TYPE - LAHIRE ライフル

> i 3 7 4 3 7 — 4 6 8 5 <

> i 3 7 4 3 8 — 4 6 8 5 <

戦闘機をそのまま人型にしたような、独特の鋭角と前傾姿勢を持つネクスト。 LINE ARK以前の“彼”の搭乗機。

防御力や安定性能に欠けるもののホワイトグリントすら超える瞬間速度を持つ速度特化型近接戦闘使用のネクストで、武装もそれに合わせた物が多い。

主な武装は左腕に近接戦用ショットガンSG - O700、右腕にはアサルトライフルAR - O700、背中には独特の四連チェインガンXCG - B050を二つ。

中距離支援を行う際には右腕のアサルトライフルはそのままに、左腕にレーザーバズーカ型実験兵器ER - O705、背中には二方向から飛翔する四連PMミサイルMP - O901を二つ装備する。

X - S O B R E R O

> i 3 7 4 3 9 — 4 6 8 5 <

フラジール

通称壊れやすい物、その名の通り他の戦術機の三分の一の装甲すら無い。特筆すべきはその異形のフォルム。

前から見ると非常に薄く、板の様にしか見えない頭部。胴体は肩と背骨の部分しか無い、文字にすればT。その腕は肘が存在せず指も無い、武器はただ“挟むだけ”である。

両足も膝が無いためにくの字の様な板にしか見えない、これらの情報を合わせるとこうなる

穴 上から頭、肩、両腕、足

尚、この機体を使って彼は一度実戦に出ており、その際には「アスピナの変態兵器」「アスピナは変態」「空飛ぶ変態飛行機」と散々な渾名を得た。

しかしその実力 特に速度の一点においては筆舌に尽くしがたい。穴の字のような巫山戯たフォルム故に空力特性は非常に高く、更に背中には追加ブースターACB - O710を装備したその瞬間速度は“時速約6000kmオーバー”

現代史上最速の偵察機、SR - 71の速度がマッハ3.2。つまり時速3916km。一方この機体は時速約6000km以上。

ちなみに一般の戦術器も時速800kmくらいが限度。最早AOあたまおかし

直立不動の体勢や、ゆっくりとした移動から急激に方向転換して時速6000km以上を出して視界から消え去る。最早ブーストというよりも“レポート”にしか思えない。

武装は両腕に強化型マシンガン、03 - MOTOR COBRAを二挺。

正直ネタのため、作中に出るかは不明。

## 某ゲーム風ステータス

戦術機操縦： B + 数多の衛士の中でも非常に高い戦術機の操縦能力。

並みの衛士では十人程度で同時に奇襲を仕掛けない限りは彼を倒す事は難しい。

ネクスト操縦： A + + + 戦術機の中でもネクストと呼ばれる物をどれほど上手く操れるか。

基本的にA M S適正の高さに比例して上昇し、このレベルまで辿り着くと精密機械すら超える操縦を可能とし、一機で戦術機数十機分以上の戦闘能力となる。

A M S適正： A + + + 人間のままでは絶対に辿り着けない境地に生身の人間のままたどり着いている。

あらゆる情報を一瞬で電気信号に変換、それと同時に電気信号を一瞬で自分の脳内で情報として処理する事が可能。

頸椎のジャックと繋げることににより、常人を遥かに超える速度でのP C操作が可能。

心眼（偽）： A - 己と感覚を共有するネクストと共に戦い続けた事により得た第六感であり、危険察知能力。

完全な死角からの攻撃ですら反応が可能、生身の状態でもこのスキルは常に発動している。

戦闘技術（偽）： B + 己と感覚を共有するネクストと共に戦い続けた事により得た戦闘技術、危機的な状況に陥った際にネクストを操縦するように自分の体を動かし、危険を回避可能。

大人と正面から渡り合い、武装さえ持つていれば数体の戦車級とも

まともに戦える。

勇猛…C 戦闘中のみ発動、興奮状態に陥る事により威圧を無効化して恐怖心等といったものを軽減させる。

一方で知性の若干の低下を招いている。

実戦経験…D - 数回だけ実践を経験、一応経験値となっている程度。

自信過剰な者がこのスキルを持っていて、且つランクが低いと自分の能力を過信して戦死する事も有るためメリットとデメリットを併せ持つスキル

## Word

AMS：アスピナ機関及びリー・バトラーが提唱した次世代の戦術器、ネクストを操縦するためのシステム。

電気信号を脊髄を介し脳に直接送り込み、『思考と同時に攻撃を行う』事を可能としたが、それ故にこれを扱える物は何百万人に一人といった規模でしか存在しない。

さらに、それで見つかった者達のなかにも著しい優劣の差があり、実戦で使えるのはその中のほんの一握り。

彼等は適正や能力によって“ランク付け”されており、このランクとはアスピナ機関における実質的な階級。

ランク1は機関内において通常の軍の左官クラスの発言力を持つ。



ネクスト：AMSを搭載し、通常よりも遥かに精密、機敏な動きを得た戦術機。

AMS適正の高い物が搭乗したネクストは一機で戦術機数十機分の戦力となる程の強さを誇り、“彼”は搭乗した際には一騎当千の戦果を上げる。

尚、ネクストとAMSで操縦している時は機体のダメージはモロにパイロットに直結する。当然機体が戦闘中に機能停止すればパイロットの脳もそれと同じように全ての機能を停止する。

これは直前でAMSアダプタを引き離す事により回避できるが、それを戦闘中に行えば当然機体を操縦できなくなって死ぬ この様なデメリットも存在する

AMS障害：AMS適正の低い物がAMSの接続レベルを上げすぎた際に発生する人格障害。

症状は多種多様だが、主に自己の喪失や精神崩壊が主。

また、極稀では有るがAMS適正が高い物もこの人格障害を発症する事も有る。

SALINE05：通称“グリントミサイル”、OPで一目惚れし、実際戦ってその余りの性能にトラウマになったプレイヤーは多い等非常に高い誘導性能、威力、長時間戦える装弾数と正直あの性能は酷いと思う。レギュ1,00にすれば地獄が見れるぞ!!

このマブラヴ世界に置けるグリントミサイルは、その耐性能を遺憾無く発揮する分裂ミサイル。 あたまおかしい 但しゲーム基準なので装弾数がAO

051ANNR：ホワイトグリントが右腕に持つライフル、その性能は「051ANNR、相手は動けなくなって死ぬ」。特にレギユ1,00では地獄を見れるぞ！！

中、遠距離において非常に高い（厨）性能を発揮し、着弾時の衝撃は非常に高く、要撃級ですら一発命中するだけで動きを止める事が可能。俗に言うハメ殺し。

近接戦闘に置ける取り回しは少々悪い物の、先端部にはスパイクが装備されており一応近接戦闘も可能。

063ANNR：ホワイトグリントが左腕に持つアサルトライフル、火力こそ低いものの高い水準で纏まった性能を誇る。

威力から中距離戦闘に優れており、命中精度が非常に高い。

尚、これ以外にもホワイトグリントは武装を持っているが主としてこの三つを愛用している。

07-MOONLIGHT：月光、アーマードコアにおいて代々出演する最強のレーザーブレード。

使用する際にホワイトグリントの出力の20%を持っていくが、その性能は突撃級の全面装甲を簡単に両断する位

一応常にホワイトグリントに装備されているのだが、普段は目の目を全く見ない不遇の残念武器。後半からは活躍させたい。

## 設定（後書き）

Q・主人公強すぎね？

A・30機で、一ヶ月で国家の悉くを解体する兵器のパイロットですから

Q・ネクストって強いの？ やベエの？

A・通常の戦術機をWW2中のレシプロ機として、ネクストはF22通常の戦術機をT-34として、ネクストはM1A2

Q・原作キャラがネクストに乗ったりするの？

A・出切るだけ無いようにしたいです

次回からトータルイクリプス本編、早いうちに全巻読まないと……

## 第一話（前書き）

前回書き忘れていたので追記。

エクスペリメント05のエンブレムは「子供の落書きの様な乱雑さで描かれた白い数字の5」これは設定に張ってある画像で確認可能です。

イメージ曲はA C 4の「Blind Alley」となっております。

ちちない……げぶん、ジナイーダちゃんが倒せない

## 第一話

### X F J 計画要項

試作 A M S 搭載型不知火式型の運用試験。

本機は日本帝国の戦術機である不知火・式型に A M S と呼ばれる新たな操縦技術を搭載した試験的な戦術機である。

A M S 適正を所持する衛士は日本帝国内に存在しないためにアスピナ機関に所属する“エクスペリメント 0 5”を主席開発衛士とし、様々な状況下における試験を行う。

尚、本機は量産も視野に入れているために A M S の接続レベルは 0 / 0 1 A M S 適正を殆ど持たない衛士でも操縦出来る範囲内に制限する。

このレベルの A M S によって得られる利点は……………

「…………巫山戯て、いるのか…………！」

暗い一室の中、手に持つ書類に目を通しながら女性は辛辣にそう吐き捨てる。

「<sup>BETA</sup>異星起源種を打ち倒すためとはいえ、人体を改造するなど正気の沙汰ではない…………！」

その言葉を拾えば、彼女が何に対して怒りを露にしているのかを理解出来よう。

X F J 計画 次期主力戦術機の開発までの中継ぎとなる機体を開発するために練られた本計画は、二つの機体の試験運用を行う。

ひとつは不知火の改造型、一型丙に米国製のパーツを使用する事によってそのノウハウを吸収、さらなる発展を目指す不知火・式型。そしてもう一つは 書類に記載されている通りのソレ。

A M Sと呼ばれる、パイロットと戦術機を電気信号によって結びつけて戦わせる特殊な操縦技術。

当然これを行うには生身の人間では不可能。 リンクス 山猫と呼ばれる人体に特殊な改造を施した者でなければ操縦できないのだ。

しかしそれが齎す恩恵は絶大 この女性とて知らない訳では無い。

ただ一機のネクストにすら、戦術機では数十機集まろうと到底及ばない事を、そしてそのネクストが一部衛士の間で『人類の切り札』と呼ばれている事を。

だがしかし それを理解してもまだ、彼女の人間的な理性はそれを拒もうとしていた。

「明日、か……  
AMS  
帝国軍も、コレに頼るしかないのか…… B E T Aを倒すためには……」

しかし彼女の立場で、上からの命令に背くわけも当然いかず。諦めのような感情の混じった呟きは、誰にも聞かれずに

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン陸  
軍基地

総合司令部地下一階 C108ブリーフィングルーム

「さて、彼がX F J計画最後のテストパイロットとなる……」

灰色の装飾も何もない部屋の中、幾つか長机と椅子の置かれたブリーフィングルームの中に一人の少年が居た。

彼の他にも当然人は居る 男性が二名、女性が二名椅子に座っており。少年の横に立つように男性が一人、女性が一人 そして彼にぴつたりと寄り添うように立っている白衣を着た男性だ。

白衣を着た男性以外、全ての目線は少年に注がれており。一方の少年は 別に目線を返す訳でもなく、空気のようにそこに在るだけ。

「アスピナ機関出身、ランク1。 エクスペリメント05 階級は無いので、どのように接して頂いても構いません。

名前は エクス、と呼んでいただければ。」

色素の抜けたような、若干黄色がかった程度の薄い金髪にアジア人特有の黒い瞳。

身長は低く150程だろうか……室内で、5月だというのにもマフラーを付けているのは何かを隠すためだろうか、ぐるぐると固く巻いてある。

筋肉質ではなく、一般市民が此処に紛れ込んでしまったといったほうが説得力の有る程に軍人からかけ離れた姿の少年

一応、此処で少年以外の者達の心情を説明しておこう。  
まずは彼の目の前の椅子に座っている褐色肌の少女、タリサ・マナ

ンダル少尉。明らかに自分よりも遙かに若いであろう少年衛士の姿を見て彼女が思った事は単純だ。

「（おいおい、こんなガキが役に立つわけないだろ……そもそも名前も出さないような奴とどう接しろっていうんだよ！）」

次に、その隣に座るラテン系の男性　ヴァレリオ・ジアコーザ

「（よりにもよってアスピナ、か……どうにもキナ臭くて嫌だね。）

」

その反対方向に座る女性、ステラ・ブルームルは彫刻の様に無表情。

何を思っているのかすら分からないために、その隣の男性。　ユウ

ヤ・ブリッジスに移ろう。

実験体

「（エクスペリメントの五番目とは随分ふざけた名前じゃねえか…

…俺達には名乗る名前すら無いってのかよ？）」

彼の思考は、どちらかといえば怒りに染め上げられている。

エクスと名乗る少年の名前は、一般的な常識を持つ彼等には“ふざけて偽名を使っている”という風にしか映らないのだろう。最もそれが当然と思えるが。

ホワイトボードの前に立つイブラヒム・ドゥールと篁唯依の二人の心象もほぼ同じく。

そうして少年の自己紹介が終わると　その隣に立つ男性が一步前に歩みを勧め。

「私がエクスペリメント05、及び彼の乗機の管理を任されている



リー・バトラーだ。

今回X F J計画においては不知火・式型に搭載するAMSの調整も行わせてもらおう　よろしく頼むよ」

「では次に私から“ネクスト”そして“AMS”について説明させてもらおう。」

その男性の自己紹介が終わった直後、篁唯依中尉が前に出ると様々な情報が皆が持つ端末に映し出されていく。

氷のような無表情のままに、皆がソレに目を向けた事を確認すると話し始める。

「AMSとはアレゴリー・マニピュレート・システム……脊髄を介すことによつて脳、そして戦術機の統合制御体を直結させる事で戦術機を“思考”により操縦する事だ。

当然、このような操縦を行う為に様々なデメリットも存在する、まず第一に　AMS適正と呼ばれる天性の才能を持つ者のみしか使用出来ない事、さらに適正を持っていても人体の改造手術を行わないと使用出来ない事だ。

ネクストを操縦する事の出来る者をリンクスと呼び……それらリンクス全員には脊髄、延髄、頸椎を手術によつて改造し、写真のようなジャックを兼ね備えている。」

それと同時に映し出された画像は、リンクスを後ろから撮影した写真。

皆の目が行く場所はただ一点。　頸椎の部分に存在する金属製の差込口　通常の人間には絶対に存在しない様な物だ。

「しかし当然、それが贖す恩恵に関しては……最早説明する必要も無いだろう。」

一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え、跳躍ユニット無しでの空中飛行も可能。クイックブーストと呼ばれる新機構は、移動状態や停止状態からその機体の最高速度まで急加速を行う事も可能としている。

さらに、近接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至っては100倍以上の速度で反応が可能……

エクスペリメント05を初めとする、アスピナ機関のリンクスは一機で戦術機十機から三十機以上の戦果を上げる事が可能としている。」

「……ッ　！？」「」

それらの情報を聞き、皆の反応は多少の差違は有れどそれが示す意味合いは総て同じだった。

信じられない、嘘に決まっている　そんな目線が一斉に少年に向けられ、対する少年は若干困ったような表情を浮かべるだけ。

当然今の話は総て真実なのだが、確認する術は無く　この中で唯一何かを知っているかのようにヴァレリオだけが納得している。

そして、彼等を指揮する人物であるイブラヒムもこうなる事を理解していた。

故に既に手は考えてある　この最前線にて部隊内に僅かな蟠りも残したくない、ならば最前線の衛士を最も効率よく納得させる方法

……

「では、彼の着任祝いとして再度CASE：47を行う！　ただし今回の条件はテロリストがネクストとを使用していたという状況を想定して行つたために……」

そう言って彼がホワイトボードに書いていく図は単純だ。

白い三角形と、四つの黒い三角形が向き合うように配置されている

これが意味する事はこの場に居る全員は瞬時に理解した。

「既にCPは壊滅している状況にてネクスト、LINEARKをこの地点にて戦術機四機による迎撃を行う。

圧倒的有利な状況だ……この状況で、リンクスとネクストの力量を見せてもらおうといい」

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン陸軍基地

テストサイト18 第2遠州区画 E-102演習場

無数に乱立するダミービルディング郡が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている

“死んだ様な町”の中に……機械音が響きわたる

ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eが、ストライク・イーグル一挺の突撃砲を片手に、

一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いているのだ。

音響センサーにひっかからないようにゆっくりと、出来る限り音を立てず……既に何度目かわからない交差路のクリアリングを行なってから、ユウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でどちらが先に全機落とされるかという単純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などというルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るユウヤ達はエクスと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”ユウヤは一人で別行動をとっている……理由は至極単純。“最強のネクスト”とやらの力量を一対一で見てみたいからだ。

「複合センサーにも引つ掛からない……ネクストにはAMSだけじゃない、ステルスまで搭載されてるってか……？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を緩める。

その緩めたその瞬間　コックピットに警告音が響きわたる、距離は遙か前方　複合センサーが表示した単語はUnknown<sup>不明</sup>。そして此処、ユーコン陸軍基地内において一切のデータが表示されない機体などユウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？　こんだけ爆音を鳴らしながら飛行してセンサーに引つ掛からない訳がないだろうが……まあいい。さっさと撃破して終わらせてやる！）」

そう思い突撃砲を構えた途端、ユウヤは網膜に投影された情報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接

近している　迎撃はまだ間に合う、突撃砲を構える、予測される敵のポイントに向かって射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはユウヤが戦術機の操縦に関して非常に高い技量を持っている故か　だが、この反応速度ですらネクストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でレポートする様に消えたのだ。

次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照準を合わせて射撃するとまた消える。

「ッ　　どういうッ……!?」

通常ならば有り得ない自体にレーダーかセンサーの故障を疑い、何も異常が無い事を確認するとふと唯依の言葉を思い出す。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え”

“クイックブーストと呼ばれる新機構は、移動状態や停止状態からその機体の最高速度まで急加速を行う事が出来る”

“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至っては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた三つの言葉が、今になって重くのしかかり　ついにレーダーではなく肉眼で確認できたその姿は  
“白”

ビルの屋上スレスレに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名はLINE ARK。

「白のホワイト、閃光グリン トッ　　!!」

両肩から突き出すように伸びていたブースターはまるで変形するように短縮し、突き出すように出されていた両腕も至って普通の人間らしい形状に戻される。

そうして着地しようとした刹那　ユウヤは背面突撃砲を起こし、更に手に握った突撃砲の二挺の引き金を下ろし発射　放たれた二つのペイント弾はビルの隙間へと“消えた”　ホワイトグリントを捉える事は出来なかった。

急いでリーダーに目を通すも、ホワイトグリントの移動速度にリーダーの更新速度が追いつかない。　何度も演習を行なってきた今までの“直感”を用いて、背面突撃砲のガンラックを起立させて背後へと射撃しつつ水平噴射跳躍にてビルの隙間へと隠れるように逃げる。

結果から言えば、ユウヤの方が追い込まれていた。

ユウヤが反応するよりも早く背後に回り込んでいたホワイトグリントが右腕に持つ051ANNRが射撃を開始、放たれた一発のペイント弾はユウヤが起立させたガンラック“だけ”を器用に打ち抜き、ペイント弾が命中したユウヤの突撃砲は使用不能と判断される。

一方で咄嗟の判断で射撃したユウヤのペイント弾は慣性で滑るように動いていくホワイトグリントを捉えることが出来ず

「ちィッ  
ッ

隙間に隠れる事が出来た好機を生かし、弾数の心許無い突撃砲のリロードを行おうとした瞬間にまたもホワイトグリントは現れる。

ビルの影から現れたソレは地上25m程の所を飛行しながら、両腕のライフルをF15Eに向け　ストライクイーゲル　ホワイトグリントが引き金を引く直前、倒れ込むように反転しながらF15Eも手に持つ突撃砲をホワイトグリントに向ける。ストライクイーゲル

倒れ込んだ御陰でライフルの射線からは外れ、一方でF15Eの手ストライクイーゲルに持つ突撃砲は確りと標的に向けられている。

「殺<sup>ト</sup>つた!!」

そうユウヤは確信して引き金を引き 突撃砲から放たれたペイント弾は、その寸前で前方にクイックブーストを行ったホワイトグリン<sup>ト</sup>に命中する事は無かった。

急激なクイックブーストを行い、倒れ込みながらもこちらを向いて振り返ったF15E<sup>ストライクイーグル</sup>の上を跳び越し、ドリフトの要領で急旋回<sup>クイックターン</sup>地に伏せたF15E<sup>ストライクイーグル</sup>が起き上がるよりも早く、照準を合せ ホワイ<sup>ト</sup>グリン<sup>ト</sup>が左腕に持つ063ANAR<sup>ストライクイーグル</sup>が射撃、放たれたペイント弾はF15Eのコアブロックに命中。

接敵から一分と経たずして、ユウヤのF15E<sup>ストライクイーグル</sup>は大破と認定されていた

## 第一話（後書き）

ジナイーダの簡単な倒し方を誰か教えてください……

Q・エクスは何でこんな強いん？

A・ラスジナみたいに、改造人間補正＋ラスボス補正＋ドミナント補正がかかってるからです



## 第二話（前書き）

日常会話が一番難しい……

## 第二話

### ドミナント

一人の科学者によって学会に提唱された言葉だ。

「人間には、環境に適応する力が有る。ならばこのBETAに侵略され、闘争を余儀なくされた環境に適応した新たな人類。生まれ持つて、戦闘に非常に高い適正を持った人間が生まれてもおかしくないのではないか」

つまり先天的に戦闘適正を持ち、ドミナントが持つ戦闘能力は他社の追隨を許さない。

かつて伝説的なまでの戦果を上げた人物や衛士は恐らく皆ドミナントだったのだろうという、非常に単純な学説。

しかし、この説は全くとっていい程に信用されていない。

人類の進化など、所詮は絵空事。絶望的な状況に狂った学者の希望的観測……この様に誰もがこの言葉を聞き流していき、既に消えた学説だ。

だが、仮に もしもその“ドミナント”が居るとすれば、それは一体どんな人物なのだろうか。

それこそ、通常の人間にはまるで扱えないような兵器を己の手足のよくに操り。

通常の兵器に乗っても、他者を圧倒し。少口径の銃を片手に、異性起源種とすら対等に戦える存在か。

そう、そんな人間が生まれる筈は無い。  
生まれる筈が、無かった

「ッ 何なんだよ、コイツ!?」

「成程……確かにコイツあ……!!」  
「……!!」

一筋の白い閃光が、ビルの屋上スレスレに高速で飛行しながら両腕のライフルを放つ 放たれた弾丸は、狙いすましたかのように一機の戦術機の背部に命中。

オレンジの塗料が一瞬でぶちまけられた背面突撃砲は使用不能と判定されて切り離される、こうしてまた一つ戦術機は武器を失っていく。

しかしその一方で、ネクスト ホワイトグリントに一発も弾丸を命中させる事は出来ていない。

放たれた弾丸は、悉くクイックブーストによって回避され、戦術機ならば有り得ないような三次元起動を行なって照準をずらし、こちらが攻めあぐねるとライフルを使って“威嚇”を行う。

タイミングを合わせた十字砲火すら、一瞬後方に退避したかと思うと急激な加速を行なって回り込むように背後を取り、ほんの数発だけ弾丸を発射。

明らかに狙いを定められて放たれた弾丸は、二機のストライクイーグル アク F15EとF-15・ACTVの足元からほんの数cmずれたところに着弾する。

「舐めて、やがるのかよ ちくしょおおッ!」

挑発するかのようなその行動に、真っ先に怒りを示したのは元々短気なタリサ・マナンドル。

片腕に残された一挺の突撃砲を構えると、全速力で水平噴射跳躍。ホライゾナルブースト

一瞬で距離を詰めつつ引き金を引いた瞬間　ホワイトグリントも動きを見せる。

「ん、なあっ!?!」

タリサの水平噴射跳躍と同じタイミングで前方にクイックブースト　ホライゾナルブースト  
アクティヴイーグル

タリサのF - 15・ACTVとホワイトグリントはお互いに接近するように加速するが、激突はしない。

地面を走るF - 15・ACTVに対して、ホワイトグリントは上空アクティヴイーグル

当然、背面突撃砲を捨てたF - 15・ACTVにとって己の真上というのは最早後方危険円錐域と等しい意味合いを持つ。そこを取られたままホワイトグリントは左腕の063ANARを連射。トップアタックの様に上部から放たれたペイント弾は、両肩と頭部、そしてコックピットブロックに被弾。

それと同時に、ホワイトグリントの体がまたも“変形”を始める。背部の二段に並べられた無数のブースターは一行へと代わり、両腕は突き出すように前へ、頭は胴体にうずめられ

「ッ

」

確かにソレを視界で捉えたものの、僅かにホワイトグリントの方が早かった。

再び、瞬間的に時速2000kmを超えるオーバードブーストを行

い飛翔していくホワイトグリントは、二機ストライクイーグルのF15Eにヘッドオンで突っ込むようにしながら両腕のライフルを乱射

「あーッ、納得いかなエーッ!!」

模擬戦の終了後、ブリーフィングルームにて悪態を吐きながらタリサは言う。

先の戦闘結果　赤子の手を捻るように弄ばれ、己が起死回生の一手を放ったと思えば漸く本気を出して悉くその作戦を粉碎する。

明らかに最初の数分は“遊んで”いた……いや、タリサから見れば“遊ばれて”いたのだ。

それは当然、衛士としての誇りを持つタリサにとって我慢できる事ではない。

しかしタリサとて分かっていた　数日前のソ連の戦術機との突発的なドッグファイトの時ですら認めようとしなかったタリサですら認めてしまった　彼我の圧倒的な能力の差を

「あれがネクスト……確かに、あんな戦術機が何十機も居たら戦局は簡単にひっくり返るわね」

「だが実際のところ、ネクストが最も活躍できるのはハイヴの突入戦じゃなくて開けた土地でのBETAの闘争だからな。

あんな戦場じゃネクストは持ち前の機動力を活かし放題だし……で、ユウヤはどう思う？」

「どう、って……」

突如話を振られたユウヤは、若干の戸惑いを見せる。

考え事に耽っていたのか、ずっと会話に参加しなかったのをヴァレリオも不振に思ったのだろうか……

奇しくもユウヤが考えていた事も彼らの会話内容と同じく、先程の作戦のネクストの　いや、“パイロット”の動きだ。

「……アイツ、常に俺の背後を狙ってきてやがった……ビルの隙間に隠れたときも、最後に攻撃する時も……」

思い返せば、ずっとそうだ。

一番最初、オーバードブーストで近づいてきたホワイトグリントを迎撃しようとするれば瞬間的にビルの隙間に消えていき、次に現れたのは己の背後。

武装を一つ失いながらもそこから退避し、リロードを行おうとすればまたもビルの背後から現れる。そうしてこれに反撃しようとするれば今度は己の頭を飛び越えて背後を取り、射撃　大破。

まるで全ての行動を先読みしていたかのようなこの行動、これにユウヤは常に翻弄されていた。

「そついえばそうね。……あんな動き、よつぽどAH戦演習をしない限り出来る動きじゃ……」

「残念ながら」

ステラの言葉を遮るようにブリーフィングルームに現れたのは、アスピナ機関から派遣されたリー・バトラー。

「彼が対人戦闘を行なったのは……対ネクスト戦を除けば今回が初めてですよ。」

……ええ、良いデータが取れましたとも。有難うございます」

嫌味ったらしくそう言う彼の目付きには、侮蔑にも似た感情が見て取れる。

それもステラやユウヤだけではない 全員に向けて、だ。そうして、少し遅れて先の少年が入ってくる。

何処か水気を帯びている金髪から察するにシャワーでも浴びてきたのか……何処か火照ったような表情で、首筋には先程と同じくマブラー。

リーに向けて遅れましたと呟きながら頭を下げ、顔をアルゴス試験小隊の面々に向ける 一人の少女と目線が合う。

「えっと……なんでそんな……怒ってるのでしょうか？」

「何でって 本当に分かってねーのかよ？」

「……えっと……？」

「ッ て、めえっ……！！」

敵意丸出しでエクスを睨みつけるタリサだ。やはり先程の怒りは収まっておらず、それ故にエクスに向ける目線もかなり冷たいものだ。

しかしそれでも惚けようとするような態度を見せる少年に業を煮やして立ち上がった瞬間

「ああ、先程の戦闘内容ですか？ アレは私が指示した物ですよ。」

貴方達がネクストの力に不信感を抱いているようでしたので、“出来る限り遊んでから”倒せ、とね……」

「……………!!」

そう挑発する様に発言するリーに対して　当然、タリサは何も出来ない。

軍属で無い故に階級こそ無いにしろ、彼はX F J 計画における一つの要。　A M S に関する職務を一手に背負う重要人物なのだ。　殴りかかりなどすれば自分にも、そして周りの人間にまで事が及ぶ可能性が有る。

普段ならばその短気な性格から殴りかかるまではいかにしろ、文句かイヤミの一つでも言いそうな物では有ったが

それを見た彼は、ほう……………と意味深な嘆息の息を漏らすだけで。

「では、失礼しますよ？　私は先のホワイトグリントのデータを纏めなくてはいけないのでね。」

終始侮蔑の色を目に移したまま、そう言って立ち去っていく。

後に残されたのは、剣呑とした静寂とアルゴス試験小隊の面々にエクスだけ　何か迂闊な事を少しでも喋ったら爆発してしまいそうな緊張感の空気の中。

「あ、あのっ……………!」

最初に口を開いたのは、意外にも無口だと思われていたエクス。緊張のせいかな若干上擦った声は実年齢よりも更に低い年齢の子供の声を彷彿とさせる物で、とても先程まであの様な戦いを披露していた物とは思えない。

そのギャップには一瞬皆も驚いたような顔をするも、次の言葉は何



かと清聴する。

「あの人の非礼は僕から謝罪します……ですけど、バトラーさんも凄く大変で、だからあんな風に」

「だったら！ 黙って許せていうのかよ！？」

「そ、そうじゃなくてっ……！」

「でもそうね、私もあそこまで言われたら黙ってられないかしら……」

驚くことに、息巻くタリサに最初に加勢したのはステラだった。

ここでは無言を貫いているもののユウヤとヴァレリオとて同じ考えだ、目の前の少年は上の命令に従っただけで何の非もない。とはいえ、先程のあの男の言った事はそう易易と許せる物でもない。

当然彼らの気持ちも少年は理解しているのか。それ以上リー・バトラーをかばう事はなく……

「……今度」

「ん？」

「今度、僕用の戦術機が届きます。AMSは搭載していますけど、通常操縦ノーマルと同じ能力で……」

「……………へえ……………」

取り繕うように言われた言葉、その意味を最初にタリサ。それ以外の三人も理解したのか表情に笑顔を浮かべる。

機体差も、上官の命令も無い完全に実力勝負の申し出……それはアルゴス試験小隊。特にタリサにとって願ったり叶ったりな物で。

「分かった、今回はお前の勝ちって事にしておいてやるよ！  
だけど、次は絶対に負けねーからなッ！！」

「機動ログに損傷は完璧、あれほどの戦闘をしておきながら精神状態は常に安定したまま……」

「……これが、これがリンクスか」

一人自室で篁唯依はそうぼやく。

手には先の戦闘の資料　その半数以上をエクスペリメント05とホワイトグリンツの物が占めている。

先程のAH戦演習は当然唯依も閲覧していた　最初は半信半疑で、所詮ネクストのスペックなどデータ上の物だけで実際は大した事がないのではないかと。

しかし　違った。

間違いない、リンクスは　ネクストは戦力になる。

出来ることならば一刻も早く帝国もネクストを量産して国内のBE  
TAを、ハイヴを徹底的に叩くべき

「　だが……」

そのためには、AMS適正を持つ貴重な人間　もしも適正があるのならばあのような幼子の体を改造してまで戦場に送り出さなく

てはいけない……

さらにそれに付き纏うAMS障害、人格障害の危機……機体ダメージがフィードバックする特性から当然PTSDも出るだろう。

実践で使うには余りにも 余りにも危険で、非人道的な兵器なのだ。

「彼奴とて、それは分かっている筈……」

……なら、知っていて尚それを受け入れる彼は一体何故……？ 何故あのような年端もいかない少年が、それほどのリスクを背負ってまでネクストに乗っているのだろうか……？

唯依が衛士となった理由は国と民を守るべき武家に生まれたからだだが、彼は何故あそこまでして戦おうとする……？

己と同じ“公”故の理由なのか、それとも“私”故の理由なのか。

資料など調べても、彼の経歴は一切出てこないし本名ですら出てこない。

それが分からない以上、彼に直接聞くしか無いのだが

「……彼奴はただのテストパイロットだ……それ以上でも、それ以下でも無い……」

何故自分が、こうも他人……それも特定の個人に冷たく当たるのか……今まではこんな事無かったというのに。

此処に来てから一人目のユウヤ・ブリッジスは理由がハッキリしている。

なら、自分は何故彼 エクスペリメント05 にこうも冷たく当たろうとするのか、答えはまだ分からないまま……

## 第二話（後書き）

### 突発的なアンケート

Q・これから話しが進むに連れて他のリンクス達も少しずつ出てきますが、誰が良いかをアンケートで募集します  
物語の重要部分に関わる事は行いません、あくまで主人公の戦友や仲間としてちよつとだけ出てくるだけです。

- A・重装ENタンクの自己中お姉さん スティレット
- B・20秒で防衛部隊全滅させるマジキチイレギュラー ジュリアス
- C・相性最高の実弾派重量級 メイ・グリーンフィールド
- D・貴方のハートも弾薬費も吹っ飛ばす！ エイップール
- E・悪夢のフラッシュロケット、死の月光 アンジェ
- F・少佐砲に泣かされたガチタンプレイヤーは数知れず ウィン・D

一人二票まで、好きなキャラに投票して下さい  
投票は感想欄へお願いします。 人気投票で上位のキャラからどんどん出していくので……

## 追記 2 各設定の訂正について

ミド・アウリエルのリンクスレポートを読み、色々と設定の間違いを確認したので訂正です。

・AMS接続用のジャックについて  
金属製のAVケーブルの様な者ではなく、肌色のシリコンの様なもの。外見的にはじっくり見ないと気付かない程度。  
正確な場所は頸椎ではなく首の横側。脊髄等はナノマシンを用いて自然と改造されていく。

・機体ダメージのフィードバックについて  
機体のおった損傷をセンサーが感知し、それを直接触覚や痛覚として登場者に伝える事はない。  
その代わり、本来の手足が有る筈なのに別の手足を失ったような幻肢感覚に苛まれる。  
これはネクストを降りた際にも同じく、適正の低い者はこの時点で睡眠薬が無いと眠れない程の激しい頭痛と嘔吐感に襲われる。

### 第三話（前書き）

これから正月にかけて忙しいので、今年の更新は多分これが最後になると思います  
非常に短いです、ごめんなさい

### 第三話

“何故、お前は戦う？”

初めて僕にその問いをかけたのは誰だったか。

“お前の求める答えは何だ？”

その時、僕は答えを出せなかった。

今ならば、この問いに答えを返せるのだろうか。

私は思想家だ、私は私ですら破壊出来た

私は射撃手だ、それしかできない赤ん坊

私の心はもうかき乱れている、どうか貴方から私の心に触れて欲しい

どうか私に、この戦場の答えを聞かせて欲しい

私は思想家だ、そんな私はもう殺してしまった

私は射撃手だ、ただ赤子のように殺す事しか出来ない

私の心はもう限界だ、貴方にこの心を救って欲しい

どうか私の、この戦場の答えを聞いて欲しい

私は戦場の つまでも てい

∴ Play for Answer

「精神状態に、今までに見られない反応……？」

「装置に異常は見られていない……おかしいな、これは……」

ユーコン基地、アスピナ機関に貸し与えられた施設の一室では今日も実験が行われている。

なんていう事はない人体実験 モルモットに投薬を行い、センサーでデータを何時間も取り続ける。彼らからしてみればその程度の認識だ。

彼等にとってリンクスなど所詮はその程度 己の研究への欲望を発散させる人形に過ぎない。

そんな彼等が、この異常なデータに興味を示したのは当然の帰結か。



「珍しいですね、彼が心を乱すなんて……そんな要因は無いと思っ  
ていましたか」

「たしかにな……この基地にして、この短期間で彼の心を揺さぶる  
事件が起きたとでも？」

「……過度な心理状態の急変はAMS適応障害を引き起こす事もある、  
が この程度ならば問題は無い。」

「そうですね……ではこれより、神経系のナノマシンの動作チェック  
及びAMS伸長度合いの確認を」

2001年、5月10日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン  
陸軍基地

頭がボーツとしている、視界もどこかぼやけていて、上手く真っ  
直ぐに歩けない。

気分も優れている訳ではなく かといって落ち込んでいる訳でも  
ない、微妙な感覚が延々と続いている。

実験が終わった後はいつもこうだ。

「エクスペリメント、05……」

アスピナ機関において、リンクスは本名で呼ばれる事はあまり無

い 理由は知らないが、上には事情が有るのだろつ。

与えられる名は半ばコードネームじみた物ばかり。人間らしい名を与えられる者も居れば、酒や武器の名前をもじっただけの者も居る。

その中で唯一 僕だけが、このような名前で呼ばれているのだ。

五番目の実験体……別にこの名前が不服という事はないし、事実僕の立場もそれと同じ。

実戦に出る事無く、延々と投薬試験やA M Sの実験、J I V E Sによる動作チェックや戦場における試作品の耐性テスト  
ただこのような“お遊び”にも近い試験を二、三年も続けている。

「ランク1、か……」

飛んだ皮肉じゃないか、実戦経験は殆ど無い癖にちよつと適正が有ってシミュレーターで強いから天才扱い。  
自分なんかよりも、実践経験の豊富なリンクスの方が強いに決まっているのに……

「なにが、てんさいだよ……」

その言葉は痛烈な自虐か、己を天才と祭り上げる者達への叱咤か。どんどんと意識に白くもやがかかっていく状態の中、徐々に足腰にも力が入らなくなっていき壁にもたれかかる。

……ああもうこのまま眠ってしまおうか……思考能力も判断能力も徐々に奪われ始めたその時。

「貴様は……お、おい？ 大丈夫か！？」

目の前から声 女性の物。 なんとか開いた視界に映ったその  
姿は、つい先日にも見た確か

「たか、むらちゅう……い……？」

### 第三話（後書き）

第二話のアンケートはまだまだ募集してますよー

尚、主人公のテーマ曲が完全に決まったので、ここにて

通常時「Beginning of Breeding」  
「Equinox of Insanity」

戦闘時「Time of Insanity」  
「Blind Alley」

普段は大人しく、寧ろ寂しげなのに戦闘になればいきなり激しく敵を殲滅しようとする……

そんな感じのイメージを抱いて頂ければ、ぶっちゃけ作者がこの文章を書く時はいつもこのうちどれかが流れています

尚、序盤で長々と出ている歌は「Thinker」……といっても本家は英語ですが

翻訳内容は主人公にあわせて一部をほんの少しだけ改変した物です。

では皆さん、よいお年を！

今年最後の更新      もといネタ（前書き）

ただのネタ

ネタ、どうしようも無いネタ

一応第一話のバリュエーションという設定

## 今年最後の更新 もといネタ

### ネタの1

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン陸軍基地

テストサイト18 第2遠州区画 E-102演習場

無数に乱立するダミービルディング郡が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている

“死んだ様な町”の中に……機械音が響きわたる

ストライク・イーグル

ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eが、一挺の突撃砲を片手に、一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いているのだ。

音響センサーにひっかからないようにゆっくりと、出来る限り音を立てず……既に何度目かわからない交差路のクリアリングを行なつてから、ユウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でどちらが先に全機落とされるかという単純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などというルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るユウヤ達はエクスと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”ユウヤは一人で別行動をとっている……理由は

至極単純。 “最強のネクスト”とやらの力量を一对一で見てみた  
いからだ。

「複合センサーにも引ッ掛からない……ネクストにはAMSだけじ  
やなく、ステルスまで搭載されてるってか……？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を  
緩める。

その緩めたその瞬間 コックピットに警告音が響きわたる、距離  
は遙か前方 複合センサーが表示した単語はUnknown。  
そして此処、ユーコン陸軍基地内において一切のデータが表示さ  
れない機体などユウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？ こんだけ爆音を鳴らしなが  
ら飛行してセンサーに引ッ掛からない訳がないだろうが……  
まあいい。 さっさと撃破して終わらせてやる！）」

そう思い突撃砲を構えた途端、ユウヤは網膜に投影された情  
報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接  
近している 迎撃はまだ間に合う、突撃砲を構える、予測される  
敵のポイントに向かって射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはユウヤが戦術機の操縦に関して  
非常に高い技量を持っている故か だが、この反応速度ですらネ  
クストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でレポートする様に消えたのだ。  
次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照  
準を合わせて射撃するとまた消える。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え”

“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至っては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた二つの言葉が、今になって重くのしかかり　　ついにリーダーではなく肉眼で確認できたその姿は  
“白”

ビルの屋上スレスレに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名はLINE ARK。

「<sup>白の</sup>ホワイト、<sup>閃光</sup>グリッツ　　……え？」

それは、なんと形容すれば良いのだろうか。

右腕の様に突き出されたそれは六本の鉄板　ギザギザとした鉄屑がまとわりついたかのような　ユウヤ・ブリッジスの記憶に有るそれは、モーターブレードとかチェインソーとか呼ばれる物。

その六本のチェインソーは円柱の様に配置され、それは突き出されたままドリルの様に高速回転し　余りの熱量に赤く赤熱したソレは周囲に熱を散時き、大気すら赤く燃やしている。

「ちょ、ちよつと待て　　」

一瞬、そのチェインソーを大きく振りかぶったと思うと　右ストレートの様に正面へ再度突き出す。  
高速回転する六本のチェインソーは、アスファルトを焼き溶かし、地響きの様なおぞましい音を立てながら、ユウヤ・ブリッジスへ迫り

ギヤアアアイイイイイイン！！



「う、うわああああ!？」

アスピナ機関が開発したオーバードウェポンの一つ、“グラインドブレード”

六本のチェーンソーを赤熱する程の熱量が発生するまで高速回転させ、オーバードブースト、クイックブーストと同時に突進しながら突き出す近接戦闘における究極兵器。

模擬戦用に威力を落としていたとはいえ、その凄まじいインパクトはユウヤ・ブリッジスの心に凄まじい傷を作った

ネタの2

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州 ユーコン陸軍基地

テストサイト18 第2遠州区画 E-102演習場

無数に乱立するダミービルディング郡が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている

“死んだ様な町”の中に……機械音が響きわたる

ストライク・イーグル

ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eが、一挺の突撃砲を片手に、一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いて

いるのだ。

音響センサーにひっかからないようにゆっくりと、出来る限り音を立てず……既に何度目かわからない交差路のクリアリングを行なうてから、ユウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でどちらが先に全機落とされるかという単純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などというルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るユウヤ達はエクスと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”ユウヤは一人で別行動をとっている……理由は至極単純。“最強のネクスト”とやらの力量を一対一で見てみたいからだ。

「複合センサーにも引つ掛からない……ネクストにはAMSだけじゃなく、ステルスまで搭載されてるってか……？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を緩める。

その緩めたその瞬間 コックピットに警告音が響きわたる、距離は遙か前方 複合センサーが表示した単語はUnknown<sup>不明</sup>。

そして此処、ユーコン陸軍基地内において一切のデータが表示されない機体などユウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？ こんだけ爆音を鳴らしながら飛行してセンサーに引つ掛からない訳がないだろうが……まあいい。さっさと撃破して終わらせてやる！）」

そう思い突撃砲を構えた途端、ユウヤは網膜に投影された情報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接近している。迎撃はまだ間に合う、突撃砲を構える、予測される敵のポイントに向かって射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはユウヤが戦術機の操縦に関して非常に高い技量を持っている故か。だが、この反応速度ですらネクストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でレポートする様に消えたのだ。次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照準を合わせて射撃するとまた消える。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え”

“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至っては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた二つの言葉が、今になって重くのしかかり。ついにレーダーではなく肉眼で確認できたその姿は“白”

ビルの上スレスレに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名はLINE ARK。

「<sup>白の</sup>ホワイト、<sup>閃光</sup>グリーンツ ……え？」

その姿は、純白。

ともすれば戦術機よりも巨大な榴弾砲を背に持ち、両腕は奇形例えるならば、直方体にそのまま穴を開けたような。

神話の御世において  
I n T h e M y t h ,

その速度は、鈍足。

先程までの異常な加速は追加ブースター V O B によって一時的に得ていた物であり、その拳動はそこらの戦車と同じ程度。

神とは即ち  
G o d I s

その装甲は、城塞。

戦術機の持つ120mmですら貫けるかが不安になる、要塞をそのまま人型にしたかの様な分厚い装甲。

ガチタンである  
F o r c e

その脚部は、戦車。

雪原を、砂漠を、沼地をも走破する究極の車輪。 その名を無限軌道、キャタピラと言う。

ガチタン、ガチタン、ガチタン。

まるで時代を逆行したかのような、ただ己のネクストの装甲を信頼し、回避を捨て、極限まで攻撃に特化したその剛毅なる姿。  
人はそれを（ガチタン、）と呼ぶ。

「ど、どうせ見掛け倒しだろこんなモン……！！」

ユウヤの駆るF15Eの手に持つ突撃砲からペイント弾が放たれる。  
ストライクイーグル

回避を捨て去ったガチタンの装甲に、それは容易く命中する が、

しかし

「これで大破判定じゃねえのかよ!？」

幾らコックピット部分に命中しようとも、所詮それは36mmのちっぽけな弾丸　ガチタン 神にその様な物が効く筈が無い。

例えるならば、針で城塞に穴を開けるような事　　兎戯、という文字がもつとも相応しいだろう。

放たれるペイント弾の荒しの中、ゆつくりと神ガチタンは銃口を

ネタの3

2001年、5月9日アメリカ合衆国・アラスカ州　ユーコン陸軍基地

テストサイト18　第2遠州区画　E-102演習場

無数に乱立するダミービルディング郡が広がる演習場。

ガラスは割れてビルのコンクリートも所々剥がれ落ち、崩れている“死んだ様な町”の中に……機械音が響きわたる

ユウヤ・ブリッジスの乗るF-15Eが、一挺の突撃砲を片手に、一挺の突撃砲を背面に装備してそのビルの隙間を縫うように歩いているのだ。

音響センサーにひっかからないようにゆつくりと、出来る限り音を立てず……既に何度目かわからない交差路のクリアリングを行なっ

てから、ユウヤは思考する。

「演習開始から数分……あのガキにも動きが無い」

今回の演習は、一対四でどちらが先に全機落とされるかという単純な戦闘だ。

指揮官機を落とせば勝ち、などというルールもない完全な“殺し合い”を想定した戦闘演習……本来数で勝るユウヤ達はエクストと名乗る少年を誘い込み袋叩きにすればいい。それが最も効果的な作戦だ。

その中で“あえて”ユウヤは一人で別行動をとっている……理由は至極単純。“最強のネクスト”とやらの力量を一対一で見てみたいからだ。

「複合センサーにも引つ掛からない……ネクストにはAMSだけじゃなく、ステルスまで搭載されてるってか……？」

そうして再度交差路をクリアリングしてから進み……ふと緊張を緩める。

その緩めたその瞬間 コックピットに警告音が響きわたる、距離は遙か前方 複合センサーが表示した単語はUnknown<sup>不明</sup>。

そして此処、ユーコン陸軍基地内において一切のデータが表示されない機体などユウヤが思い当たる上では一機しか存在しない。

「（おいおい、あいつは馬鹿か……？ こんだけ爆音を鳴らしながら飛行してセンサーに引つ掛からない訳がないだろうが……まあいい。さっさと撃破して終わらせてやる！）」

そう思い突撃砲を構えた途端、ユウヤは網膜に投影された情報に目を見開く。

先程まで遙か彼方に存在した敵を示す赤点が、既にすぐ近くまで接近している。迎撃はまだ間に合う、突撃砲を構える、予測される敵のポイントに向かって射撃

驚きながらもこの動作を行えたのはユウヤが戦術機の操縦に関して非常に高い技量を持っている故か。だが、この反応速度ですらネクストには遅く見えた。

レーダーに移る赤点が、一瞬でレポートする様に消えたのだ。

次には先に居た場所よりも横にずれた場所に表れて、再度そこに照準を合わせて射撃するとまた消える。

“一般的なネクストですら最高速度は時速1500kmを優に越え”

“接戦闘における反応速度は一般的な戦術機の数十倍……彼、エクスペリメント05に至っては100倍以上の速度で反応が可能”

ブリーフィングで唯依から聞いた二つの言葉が、今になって重くのしかかり。ついにレーダーではなく肉眼で確認できたその姿は“白”

ビルの屋上スレスレに、爆音と煙を撒き散らしながら現れたその戦術機の名はLINE ARK。

「<sup>白の</sup>ホワイト、<sup>閃光</sup>グリンツ ……え？」

## 修正プログラム 最終レベル

確かにユウヤ・ブリッジスはホワイトグリンツが僅かながら変形機構を備えている事を知っている。

ならば、アレは何だ？

巨大なアンテナブレードの様な物を前面に備え、超大型のバックパツクを背中に備える。

カラーリングはホワイトではなく赤。これならばレッド・グリーン

トと呼んだ方が相応しい。

その姿は      そう、戦闘機だ。      まるで翼を無くしたかのような。

全システムチェック終了

しかしその姿に、異変が起きる。

折り畳まれた両足が伸び、折り畳まれた腕も人型のソレに戻る。

前方に伸びていたブレードアンテナの様な物は後ろに下がりテールスタビライザーに。

触ったら折れてしまいそうな胴体なのに、それから放たれる威圧感  
はネクストとかそんな話しでは無い。

戦闘モード起動

不味い、これには勝てない。

人間の本能の様な感覚がユウヤにそう呼びかけるが、その“赤いナ  
ニカ”が振りまく殺意にも似たソレに思考を動かす事もままならな  
い。

ターゲット      確認

漸く動いたF15Eが迫撃砲を構える。  
ストライクイーグル

排除      開始



それと、同時に“赤いナニカ”も動き出した

D  
e  
s  
t  
r  
o  
y  
  
N  
i  
n  
e  
-  
b  
a  
l  
l

## 今年最後の更新      もといネタ（後書き）

べ、別に作者は最初から？が主人公とかガチタン主人公とかしたかった訳じゃないもん！！

そんな事より、オイイダウンロードコンテンツで買ったMOAが全然先に進まないのだが？    汚いさすがフロム汚い

## リメイク版 第一話（前書き）

Q・更新が遅れた理由を述べよ

A・

マブラブオルタネイティブ買ったからずっとやってた  
アリーのプラモ作ってた

コトブキヤのプラモは二度と買わねーようわああああん！！

オルタネイティブをやって、諸々の知識を得たのでリメイク開始  
相変わらずの駄文ですがお付き合い下さい

## リメイク版 第一話

2001年 4月 30日

アメリカ合衆国 ネバダ州南部 グレーム・レイク空軍基地 通称  
エリア51

アスピナ機関、米軍共同研究区域特殊実験施設

「記録、開始します」

「今回の実験は、実験対象がAMSのレベルを高めた際にどこまで耐えられるか。」

また、それが人体に」

耳障りな声が僕の乗っている戦術機の集音マイクを通して聞こえる。

この実験も既に何度目か分からない。なのに何の意味が有るのか、科学者集団はきょうも寄って集ってこの実験を繰り返し続けるのだ。

当然、その意味を一介の兵士に過ぎない僕が知る事は無い。

「……聞こえるか？」

「はい」

「これから実験を開始する、機体と接続しろ」

「了解」

そう言われて、ドライバーシートに身をあずけて 瞬間的に、頭の中に数字のような英語のような大量の情報が流れ込んで頭痛を

引き起こす

いつまで経っても、こればかりは慣れないなあ……

脊髓に埋め込まれたナノマシンが僕の機体と接続して情報を伝達し、それを脳に送られた瞬間のこの感覚

AMS適正が低い人は、この瞬間に送り込まれる情報量に耐え切れずに失神、嘔吐を引き起こす者もいるが幸いにも僕にはそれは無い。

僕の体に感謝しておこう……

その激痛は二日か三日間続き、その際には睡眠導入剤を使わないと眠れないと聞く。

例えるならば 歯医者で神経をゴリゴリと削られる感覚が頸椎をはじめとして全身を襲うとかなんとか。

僕のような適正の高い人間ならばそんな物は発生しないけれども……それでも、ランクの低い人達や適正の低い人はまだそれに苛まれている。

「るか、聞こえているか？ 実験を開始する」  
「りようかつ つ、ア……」

僕が言葉を言い終えるのも待たず、全身を奇妙な感覚が襲う。

両手足が一本ずつ増えて、それが冷たい外気に晒されている……体の内外から酷い寒気のような物が襲ってくる……！！

しかし、それは僕の機体ホワイトグリントが感じている事であり、ならば今機体と一体化している僕にそれを拒む術は無い。

だい、じょうぶ……耐えられる……耐え、られる……

思い切り、唇を噛む。

この感覚に飲まれてはいけない ホワイトグリン 機体ではない“僕”が本来持っている感覚 痛覚に必死に意識を集中して、自分の意識を手繰り寄せて離さないように……

「大丈夫な様だな、ではこれから二秒おきにAMSのレベルを少しずつ高めていく 耐えろよ？」

「っ、はいッ……!!」

出来る限り普通に声を出したつもりなのに、どうしても普段と同じように発音出来ない。

苦痛とはまた違う奇妙な感覚が、全身を這い回る……それが、だんだんと強く強くなり始め……でも、それを僕はひたすら耐えていなくてはいけないのだ。

僕はアスピナの実験体。エクスペリメント 逃げる事はできないし、逃げる場所などどこにも無い。

頭の中の思考にひたすら意識を集中して、出来る限り機体の感覚に飲まれずに自分の意識を保ち続ける ホワイトグリン

ここでもしも機体の感覚に飲まれてしまったら。……そんな事は考えたくもない

AMS 適応障害

廃人

自己損失  
人格障害  
精神異常

これらのおぞましい単語が、いつ自分の身に降りかかるか分からないのだ。

事実、僕と同じ被検体、エクスペリメント実験体の者達は皆これらの内どれかを起こし 中には死んでしまった人間まで居る。

それは、それだけは絶対に……！！

救い、なんて物は存在しない      そもそも僕は人間ですら無いのだから。

ならば耐えるだけ      終わりが出来るだけ来ないように、ひたすらひたすら耐え続けて……いつか来る終わりを先延ばしにし続ける

そう、それはまるで

いずれ来る致死のウイルスを先延ばしし続ける、この、世界の様な

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4106z/>

---

Muv-Luv TE-if-（リメイク中）

2012年1月10日23時48分発行